

社会教育施設・社会教育関係団体の活性化に向けて

～地域の教育力を高めるために～

(提 言)

平成28年3月17日

茅ヶ崎市社会教育委員会議

## 目 次

はじめに	… 2
1 公民館	… 3
2 青少年会館	… 4
3 文化資料館	… 5
4 幼稚園から見た地域との連携	… 5
5 学校から見た地域との連携	… 6
6 茅ヶ崎市ジュニアリーダーズクラブ	… 7
7 PTA	… 8
8 小学校ふれあいプラザ	… 9
9 茅ヶ崎市のまつり	… 10
おわりに	… 12
資料	
社会教育委員名簿	
起草委員会議の経過	

## はじめに

平成24年12月13日に、私たち社会教育委員会議は、茅ヶ崎市教育委員会から、「地域の教育力の向上」に向けた「地域の教育資源」の一つとしての「人材育成」についての諮問を受けました。

地域の人材ということで、次世代の育成に深く関わりのあるPTA、青少年育成推進協議会、青少年指導員、子ども会を主に調査研究をしました。

それぞれの団体、協議会の現状を把握し、茅ヶ崎の地域での人材育成がどのようなものであったらよいのか、大人の一人一人にどのような意識を持って頂ければ、地域の人材につながるのか、高い理念と理想を掲げその実現に向けて、どう方策を取ればよいのかまとめをして平成26年3月に茅ヶ崎市教育委員会へ答申を提出しました。

社会では規範意識の低下、地域では住民間の連帯感の希薄化、子どもたちにとっては社会性の低下、倫理観の不足等で、今こそ地域の人材育成が必要と感じました。

平成26年7月に社会教育委員の新しいメンバーが選出され、今後の協議事項について検討をしました。そこで教育委員会への答申で終わりではなく、さらに先の答申の中で社会教育関係団体が抱えている現状や課題が、少しでも解決方法が見いだせるよう研究調査することとしました。

社会教育委員会議では、茅ヶ崎市の社会教育施設「公民館、青少年会館、文化資料館」や、小学校ふれあいプラザの見学、子ども会に属しているジュニアリーダーズクラブの活動と会議に参加をしました。このように人材育成の場・機会は多くの所で行われていて、まだまだ本市には多くの公共施設があり場所・施設での育ちは繰り返し行われています。

市には春の市民まつり、夏のなんでも夜市、秋のふれあいまつりと、各地域では神社や自治会を中心に多くのまつりがあり、老若男女がつどい触れ合い、直に会って出会いの繰り返しでコミュニケーションを深めています。

なんでも夜市の中で市内の中学生が多く参加しています。この活動の詳細を知りたく統括している市民自治推進課への聞き取り調査を手分けして行いました。また、PTA活動から見えるものや、学校・幼稚園から地域への発信と逆に地域からの声がどの様に循環しているのか、通常の活動から見えている事を考察しました。

そこから見えてきた現状や課題をワークショップや会議等を通して、分析するとともに理想の実現に向けた方策について研究調査をしました。

今回私たちが協議してきたことが、社会教育関係団体の活動がより活性化され、問題解決に向け活用していただければ幸いです。

# 1 公民館

## (1) 現状と課題

本市の5館ある公民館は地域独立館型で、公民館運営審議会委員もそれぞれに設置されており、社会教育主事も3館にいます。これらは市民の自主的参加による地域密着型の公民館運営がなされる大きな要素となっています。

しかしながら、「積極的に活動しているのは決まった顔ばかり、初めての方には敷居が高い」「若者が少なく高齢者ばかり」「サークルに新しいメンバーが入ってこないので後継者がいない」「同じようなサークルが乱立」「活動が内向しているサークルの増加」…これらは公民館の現状や課題としてよく耳にするつぶやきです。

整理してみると、次のような状況が浮かび上がってきます。

公民館の利用者については女性や高齢者に偏り、若者や男性の利用が少ない傾向にあります。各種の役員の引き受けを敬遠する傾向があり、自主的な運営組織などの役員の固定化が見られません。

公民館主催事業については、各領域の講座等が全体的にバランスよく実施されていますが、積極的に受講する市民と公民館に全く足を運ばない市民との二極化が見られます。また、自らが学ぶ入力型活動がほとんどであり、学習した効果を発揮する出力型あるいは他の人たちと交流して学びを伝える交流型活動の補強が望まれるところです。

サークル育成・サークル活動については、会員が固定されており、メンバーの入れ替えが少ないようです。また、他のサークルとの交流が少なく、活動が内向しているサークルが増加傾向にあります。このようなことから似たようなサークルが乱立し、結果として公民館の施設利用の競争率が上昇する一因にもなっています。

次世代育成については、主催事業において子どもたちの自主運営による事業や子どもたちの社会参加を意識した事業など、新たな視点での新たな動きが見られます。

## (2) 方策

- 公民館は、市民が「ヒト・モノ・コトと出会う・学ぶ・見つける・つながる」ために、さりげない仕掛けを施していくことが求められている。特に「つながる・つなげる」ことに重点を置き事業を実施していく。
- これまで学習成果の還元としていわゆる学習発表的な活動が主となっていたが、これに加えて実働型の活動、つまり地域や学校などで実際に貢献できる活動や活躍できる場をも想定した主催事業も充実していく。さらにジャンル別サークルイベントを週間あるいは月間で展開するなど、同種のサークル間交流を活発にしていく取り組みを行う。
- 学校教育に比べて、地域の大人と子どもをつなげられるのが公民館活動の大きな特徴である。子どもたちが公民館の運営や活動に参画する機会を増やしていく。
- 積極的に活動をしているのは女性や高齢者を中心とする決まった顔ばかりで初めての方に

は敷居が高いという傾向は、ある程度やむを得ない状況であるが、公民館の役割や存在は常に周知する努力を続けなければならない。公民館職員は併せて公民館入門者、初心者が気兼ねしなくてすむ雰囲気づくりを心がける。

## 2 青少年会館

### (1) 現状と課題

青少年の健全育成を図る目的で2館の青少年会館が設置されています。梅田地区の会館は、以前は未就学児や低学年の子どもたちと大人達のサークル活動が主流で、海岸の青少年会館は、青年の活動が多いと感じました。2館とも子ども、親子、地域交流、自主事業等の多くの事業展開をしています。青少年会館の年間利用者が、10万人を超えた事を聞きました。

しかし、利用者は多くなっても各団体・各種サークルが独自に集いお互いを理解したり、連携を図るまでには行っておりません。

年1回「青少年会館フェスタ」を開催し団体・サークルの発表会が行われていますが、参加者が関係者のみで一般の参加者が少ないように見えます。利用団体関係者だけでは、青少年会館の中で一番大きな事業であるにもかかわらず、今後の事業への広がりが期待出来ないように思います。また、以前は中学生の参加があつたが今は姿が無いようです。

今後は中学生・高校生・大学生が、青少年会館に多く来てくれることを目的とした事業の実施が望まれるように思います。

### (2) 方策

- 地域の人たちが参加できるような事業を実施する時には、より多くの人足を運べるような情報発信を実施していく。
- 夏休み中、子どもたちの勉強を助ける「寺子屋」的な部屋を開設し、そこに中学生・高校生・大学生などが先生になってもらえるよう参加を呼びかけていく。
- 中学生・高校生・大学生が、企画から参加できるような事業を実施する。
- 公民館との連携で事業を企画する。(共同事業の開催や社会教育主事の活用)
- 講師は多くおられるはずですが、学びの講師やサークルの講師の方々に事業をしてもらう。また、各種の事業に参加した方々にも学習の成果を皆さんに発表できるような事業展開をしていく。
- 子どもと大人が学びあう場、大人と大人が分かち合う相互教育の場を多く設けるような事業を実施する。

### 3 文化資料館

#### (1) 現状と課題

文化資料館は、茅ヶ崎の貴重な文化財資料を収蔵・保管・展示しているまちの小さなミュージアムです。歴史も古く、「文化資料館と活動する会」の方々が、自然・民俗・考古の3つの部会を作り、資料の整理や講座の講師などで活動をしています。

自然部会では、海岸の自然調査・自然観察会を行い、夏休みには子ども向けのワークショップを開催しています。自然観察の学習と植生を通しての標本づくりは毎年行っている事業で大変人気があり、定員の5倍以上の申込みがあります。

平成27年度は、「海岸植生植物の標本づくり」に挑戦しましたが、朝早くから集まる子どももいて、とても楽しそうに参加していました。子どもたちは講師の方たちとマンツーマンで作業を進め、講師のアドバイスを聞いて真剣に標本と向き合い、集中して取り組む姿勢が印象的でした。

民俗については、茅ヶ崎のお祭りである「浜降祭の写真展」を開催しており、考古については、「石仏と社寺を訪ねる」現地探訪を行っています。また、学校への出前講座も実施していて、調査研究を進め資料整理を行い、展示や調査報告書の発行を行っています。

しかし、資料館自体を知らない人が殆どのように思われます。私もその一人でしたが、今回、社会教育委員に携わったので訪れてみました。建物が古く、人もあまり出入りがないので、ひっそりとたたずんでいるという印象でした。でも、中に入ってみると大人の私でも「わー、へえー」と声をあげるような貴重なものばかりで、多くの子どもたちにも是非見てもらい、茅ヶ崎のことを知ってもらいたいと思いました。また、事業に参加した子どもたちが将来的に資料館事業の実施する側となり携わってくれば、理想な形だと思います。また、6年後には新しい場所に移転し新たなスタートを切る予定であり、もっと多くの人に訪れてもらえることを期待します。

#### (2) 方策

- 文化資料館をより多くの人に知ってもらうために情報発信を工夫する。
- 標本などの展示物も多いので夏休みを利用した課題の提供や勉強会を充実させる。
- 次世代に繋げていく大切なものがたくさんある場所です。多くの子どもたちに事業に参加してもらうために、公民館と連携して事業を実施する。
- 茅ヶ崎へ転居してきた人向けに、茅ヶ崎の歴史のイロハを知る講座を実施する。

### 4 幼稚園から見た地域との連携

#### (1) 現状と課題

茅ヶ崎市内には、17の私立幼稚園があります。幼稚園では園庭開放を行い、広く地域の子ども

の遊び場として提供しています。そこでは、地域の人々の交流が生まれます。各園の幼稚園生活の充実の中で育っている社会性や人間関係、思いやり、生きる力への基礎が、次の小学校生活の充実と学習意欲、多様な人間関係の中で育つ社会性などにスムーズにつなげていけるように取り組んでいます。

将来を担う次世代の子どもたちと関わりを持つ教育機関としての幼稚園が、「地域の教育力の向上に向けた人材育成」について、どのような位置付けを持ち、何が取り組めるかを考察する必要があります。そして幼児教育機関の立場を尊重した上での「地域の教育力の向上」について考えます。

各園は、それぞれの教育方針のもと、「子どもたちの健やかな心身の成長を助長する」という幼稚園教育の目標に向かっていくことを尊重すべきです。各園の違いを乗り越えたところでの社会教育としての人材育成について、共有する価値観を持つ必要があります。幼稚園としてどこの部分で人材育成に関わるかは、課題となります。

親への意識は、幼稚園が発信できることでもあると考えます。「地域の教育力」を高めるということが市民レベルでなかなか浸透していない現状から考えると、親の意識をどこに向けるかが課題となります。改めて、親は子育ての責任者であることを自覚し、家庭での教育を進めたいものです。「地域の教育力」のあり方を考えた上で、家庭の日常生活でできることは、子どもたちが地域に愛着を感じることができるように育てることです。

## (2) 方策

- 幼稚園では子育てを親が一人で背負わないように、「地域の中で育つ子ども」「地域の中で育てていただく（もらう）」という地域との関わりを意識を持つことの大切さを保護者に伝える。
- 幼稚園では将来を担う子育て世代の家庭がまず、地域活動に関心を持つよう、子ども会活動、地域のまつりや運動会等の地域の情報を保護者へ知らせ、参加を促す。
- 幼稚園教育は、人格の基礎をつくる種まきの時代です。将来に向けて地域社会の担い手が育つための架け橋となれるように考えていければと思います。各園では、園庭開放での地域の人との交流を充実し、多くの参加を呼び掛けたり、市内の幼稚園にも答申の内容を伝え、それを意識した活動を実践する。

## 5 学校から見た地域との連携

### (1) 現状と課題

茅ヶ崎市教育基本計画では、基本理念を実現するための政策として「豊かな人間性と自律性をはぐくむ学校教育の充実」を掲げ、「地域の教育資源を生かした教育活動の展開」を施策の方向として打ち出しています。

したがって、学校が「学びのコミュニティ」となり、教育のテーマに基づき、保護者や地域の方々が学校の具体的な活動に参画することを通して、共に学び合う関係を生み出すことが重要になって

きます。

学校では年間を通してさまざまな活動がありますが、地域との連携や協力のおかげで豊かな取り組みとなるものが多々あります。また、毎日の生活においても、子ども達の安全を考え登下校の見守りをさせていただくなど、様々な場面で地域の方々にお世話になっています。

学習の場面では、青少年育成推進協議会や PTA の方々が窓口となり、校内の地域連携担当と連携をとり、学校の要望に応じた地域の学習材として講師を紹介してくれたり、自ら講師となってくださいます。そして、地域の皆様の思いなどをわかりやすく伝えてくれることもあります。また、講師の方々は、学校の願いを理解して、子どもたちのためにできることを進んでいき、子どもたちと共に学習に参加してくれたりしています。大人と子どもが一緒になって楽しむ取り組みは、お互いの距離を縮め、一体感を生み出しています。

日常生活の中には、子どもたちの学びの材料がたくさんあります。したがって、自分自身の生活に目を向けたり、地域の人々の生活に目を向けたりすることが大切です。自分が育まれている自然環境や地域社会の中で、様々な体験活動を通して、地域への愛情、関心を培い自分自身が成長していくためには、子どもたちが地域を知ることが必要でしょう。

しかし、地域の行事や活動に対しての子どもたちの参加は、それほど多いとはいえません。

## (2) 方策

- 学校では地域で行われる様々な行事や催しの情報を集めて、子どもたちや保護者にも知らせることで参加を促す。
- 地域の幅広い教育資源を使った事業に子どもたちに参加してもらうために、公民館などの社会教育施設との連携を図り事業の検討を行う。

## 6 茅ヶ崎市ジュニアリーダーズクラブ (J. L. C.)

### (1) 現状と課題

ジュニアリーダーズクラブの目的は、子ども会活動及び社会参加活動の意識を理解し、リーダーとしてボランティアスピリットを持って、自己の成長を高め、思いやりを大切にする仲間づくりを目的としています。

茅ヶ崎市ジュニアリーダーズクラブ(略称 J.L.C.)は、中学生と高校生を会員として子ども会活動のサポートや地域の諸団体、市主催の行事などに協力する派遣事業を中心に活動する団体です。

平成27年度現在、J.L.C.の登録者数は22人です。年々その人数は減ってきています。要因の1つには、認知度の低さが挙げられます。子ども会中心の行事が多いこととアピールの少ないことがあります。人数が減ることにより、ジュニアリーダーの負担も大きくなり、スキルアップも難しくなっています。また、ジュニアリーダーを支え指導する大人の存在も必要です。現在、ジュニアリーダーを卒業すると育成会に入りジュニアリーダーを支えています。もっと身近に指導で



きるシニアリーダーズクラブがありません。自分たちが経験したことを後輩に伝えていくことは、大切なことだと思います。

J.L.C.の認知度が上がり人数も増えれば、一人一人の負担も軽減され、より多くの活動が期待されます。活動が活発になり、ジュニアリーダーが目標を持ちそれが達成されることにより、スキルアップしていくこととなります。また、ジュニアリーダーを経験した若者が次の世代へ継承し、指導サポートできるシニアリーダーとして活躍できる組織を作ることも必要です。それによってもスキルアップにつながり、そして青少年課や茅ヶ崎市子ども会連絡協議会、育成会の役割を明確にしてジュニアリーダーの育成に関わることが大切だと考えます。

## (2) 方策

- 認知度を上げるために、ジュニアリーダーの活躍をまとめた PR 動画を撮影し、広報番組やホームページで紹介したり、市の広報紙も活用する。
- ジュニアリーダーの活動に興味がある人材の掘り起こしを行うため、中学校や高校にチラシを配布や、ポスターなどの掲示も依頼する。
- 青少年課は身だしなみやプレゼンテーションスキルなどの基礎的な能力等を教育する。
- 茅ヶ崎市のシニアリーダーとして豊かな活動ができるようなシニアリーダーズクラブを創設する。大学のボランティアなどにも声掛けをして、幅のある人材を集める。

## 7 PTA

### (1) 現状と課題

近年では少子化により保護者の数も当然のことながら減少しており、また仕事を持つ母親が多く、時間的余裕のない人が多い。そうになると、大抵の親は子どもと関わる時間が当然少なくなり、そういった保護者にとって PTA は負担でしかなくなってしまっています。

かつては PTA の主な担い手は専業主婦であり、PTA の仕事もうまく回っていました。

本来 PTA は保護者と教職員が共に子どもたちの健やかな成長の為に活動するのが目的であります。今では公民館などで家庭教育支援や子育て支援の講座も実施しており、個人的に参加できることもあるため、学校単位の PTA や茅ヶ崎市 PTA 連絡協議会で講座や研修会を実施しても参加者が少なく動員をかける場合もあります。しかし、PTA としての課題もあり、その課題を解決するためには PTA で行う研修会は必要であり、会員は積極的に参加すべきです。

より良い教育環境を作るために保護者と教職員が手を取り、協力できる体制作りを目標にし、お互いコミュニケーションを密に取り、保護者と教職員との信頼関係を強くすることが望ましいことです。しかし実際に活動する保護者が負担に感じる活動であっては意味がありません。どの学校でも PTA の役員選びは大変であります。負担感がまず先にあるために人選に苦慮していますが、役員を引き受けた人の中には、1年間やってみたら以外に楽しく、満足感の得られるものだったとの

感想も聞かれます。できる人ができる範囲で行う、また、役員だけが行うのではなく、会員が皆で事業に取り組むなどを考え、PTA 活動は大変ではありますが子どものためには必要なことです。

## (2) 方策

- PTA の体制や仕事を見直すことも必要であるため、課題を市 P 連で話し合い、問題点を共有して解決策を見出す。
- 役員の負担を軽減するために委員会を無くし、ボランティア化したり夜のパトロールを父親が行うなど、仕事の見直しを行う。
- 仕事の見直しをするにあたり、PTA 会員へのアンケートを実施するなど、会員の意見を取り入れる。
- PTA も地域団体の一つであるため、他の地域団体への協力は必要であるが、特に働く母親が夜の会合に出席するのはかなりの負担であるため、地域団体への理解を求めるようにする。

# 8 小学校ふれあいプラザ

## (1) 現状と課題

「小学校ふれあいプラザ」は平成 14 年度より放課後等の児童の安全・安心な遊び場を提供するために市の委託事業としてスタートしました。その後、平成 19 年度から始まった、国（文部科学省）の「放課後子ども教室推進事業」（国庫補助事業）に位置づけ、推進されています。開設校は徐々に増え現在、市内小学校全 19 校のうち 18 校で開設されています。

この事業は、学校・保護者・地域の方々に組織された運営委員会により、各小学校区ごとに実施しています。開設日は、パートナー（保護者・地域の方々）の見守りを受けながら子どもたちが放課後を過ごしています。

事業の円滑な実施を図るために各プラザにコーディネーターが配置されています。また、開設日・内容等は、各プラザの運営委員会で独自に決められています。

開催日は週 5 日～月 1 日まで幅があり、参加する児童の人数は 1 回数十名と多いところから、遊び場が多い学区では数名の開催日もある学区まで様々です。学年は 1～3 年の低学年がほとんどで、出入りを自由にしているプラザで高学年の利用が見られます。

内容は通常は遊具などを自由に使い、年齢の異なる児童が、交流を深めながら遊びます。また、月 1 回程度から年数回程度イベントが企画、実施され、地域の方々との交流も行われています（七夕、クリスマス会など季節の行事や、地域の方々が先生になる折紙・木工・昔遊び教室など）。開設場所は各小学校の体育館のみで、校庭なども使いたいという声も聞かれます。

平成 19 年に国の補助事業となったことにより、各プラザの代表による運営協議会が設置され、お互いに情報交換を行っていますが、各プラザはそれぞれのスタート時の運営形態から大きくは変わっていないように見えます。平成 24 年から校長会から代表者も運営協議会に参加していますが、

協力度は学校（学校長）ごとで差が大きいようです。また、「放課後子ども教室推進事業」では「学習支援の充実」（家庭の経済力等にかかわらず、学ぶ意欲がある子どもたちに学習機会を提供する取組の充実）も目指していますが、取組んでいるプラザはまだありません。

さらに、平成26年には「放課後子ども総合プラン」が国より示されました。これは「小学校ふれあいプラザ事業」と「放課後児童クラブ」の一体化または、連携化を図るものであり、平成32年までに全国で、プラザ、クラブについては学校の敷地内を優先的に利用した一体型、連携型を目指すようにするというものです。

平成14年にスタートした「小学校子どもプラザ事業」は今、国の大きな指針が示されたことにより、新たなステージの課題に取り組むことが必要になっています。

## （２）方策

- 市は「小学校子どもプラザ事業」を国の指針を基に再定義する。
- 市は再定義したプラザ事業のモデル学区を決め、その学区と協力して退職教員等ボランティアの確保や保護者・地域への広報など運営ノウハウを獲得し、運営協議会を通し他のプラザへ提供を実施する。
- 市は各プラザとその学区に合った運営形態を話し合い、その達成のための協力をする。
- 教育委員会は「放課後子ども総合プラン」を各学校長に周知し、プラザ、児童クラブとの連携、情報の交換・共有を促す。
- 学校は各家庭の教育相談等でプラザ事業を周知する。
- プラザは本来目的の「子どもの居場所づくり」としても放課後は毎日開催する。
- 今後、平日のグラウンド開放が実施されるなら、各小学校の開放委員会でスポーツ団体からのボランティアを募り実施する。

## 9 茅ヶ崎市のまつり

### （１）現状と課題

茅ヶ崎市には春の市民まつり、夏のなんでも夜市、秋のふれあいまつりなど市で行うまつりのほか、各神社を中心としたまつり、自治会でのまつり、公民館、コミュニティセンターで行われるものなど、多くのまつりが繰り広げられています。ここには多くの老若男女が参加して、楽しみながらコミュニケーションを図っております。まつりは楽しいものだけでなく、郷土の歴史やそこに集う人たちとの仲間意識でまつりを完成させる喜びが生まれます。

市で行うまつりは市民自治推進課が事務局となり、実行委員会が中心で開催しています。その中で、夏のなんでも夜市には多くの中学生が企画・販売等で参加しています。

平成20年より茅ヶ崎青年会議所(略称J C)がまつりの中で「想いやりビレッジ」というブースを設けて、中学生が多くの人と関わり、体験の中からさまざまな学びを得てほしい事をコンセプト

にして実施しています。各学校に担当者がおもむき生徒と検討して、学校独自のブースを決めていて、当日は夜間になるため保護者に同意を得て保険にも加入しています。

生徒の参加は公募等で行い、最初の年は3校の参加でしたが、平成26年度は全中学校が参加し192名で、今年度は9校が参加で開催しました。

J Cが直接学校と連絡を取り、学校は生徒を募集し、集まった時点でJ Cがすべて責任を持ち企画会議は各学校で行っています。

次世代育成が楽しいまつりを通し知識と体験から多くを学び、このまつりに参加した中学生は自分たちのパフォーマンスを考え、来場者とのコミュニケーションや他校とのふれあいから多くの学びを得ています。そして、この経験を将来はまつりを実施する側になることに意義があります。

## (2) 方策

- 学校の先生でもなく、身近な大人でもない、初めて出会う大人との活動や体験の場を多く提供して、学校教育現場以外での子どもたちの力の発揮を促す。
- 地域のまつりでも多くの大人とのふれあいから、愛着や伝承の継続の大切さを学ぶ場とし、大人になって青年団や消防団となり地域のリーダーになるように促す。
- 中学生は地域の中では立派な担い手と大人が認知する。
- 中学生だけでなく、小学生も自分たちの思いを発信できる場所を探して、実行できるよう大人が声掛けをする。
- 大人が自分たちだけで実行するのではなく、多くの中学生・高校生に学校外での体験活動の場を提供する。

## おわりに

今回の提言は限られた時間の中で、市内の社会教育関係団体と公共施設の現状・課題の掘り下げをして、将来に向けての理想の方策を協議し整理をしました。

人が育っていくには「直に会って」「出会いの繰り返し」がとても大切な要素と考えます。今回研究調査をしました公共施設や社会教育団体は、多くの子どもたちや大人の方々の参加を促して、事業や活動の中よりふれあって学び合う機会を提供しています。

平成26年3月の答申で『大人の一人一人が「教育者」であるために』としましたが、多くの保護者や地域の人たちが普段何気ないふれあいの中で、すでに教育者となっています。

茅ヶ崎市の社会教育団体は独自の人材・知識・経験の資源をもっと積極的に活用して頂き、それぞれの団体がさらなる活動の活性化へ、また、つながるための参考として活用して頂きたいです。

教育という言葉を聞くと、ほとんどの人は学校教育を思い浮かべます。もちろん第一番のことでとても大切なことではありますが、子どもたちは多くの時間を家庭や地域で過ごしています。学校教育と同じように社会教育も大切と考えます。今以上に、子どもたちが元気で、笑顔で、はつらつと過ごせるように社会教育行政関係者においては、この提言書に目をとおしていただき、さらに社会教育団体や社会教育施設が円滑に活動できるような支援のためのコーディネートを行い、しっかり堅実に育む手立てを構築して下さることを望みます。そして、多くの所で社会教育団体・社会教育施設について議論を絶やすことなく続けてほしいと願います。

平成28年3月

茅ヶ崎市社会教育委員会議議長 吉原 弘子

# 資料

# 茅ヶ崎市社会教育委員名簿

任期2年(平成26年7月1日～平成28年6月30日)

氏名	選出母体等
○ <small>やまもと</small> 山本 <small>てつじ</small> 哲史	茅ヶ崎市小学校長会 (平成27年4月24日～平成28年6月30日)
<small>さいとう</small> 齋藤 <small>ちはる</small> 千晴	茅ヶ崎市PTA連絡協議会
<small>といだ</small> 戸井田 <small>みさこ</small> 美佐子	茅ヶ崎市地域婦人団体連絡協議会
<small>ささき</small> 佐々木 <small>じゅんこ</small> 淳子(△)	茅ヶ崎市青少年指導員連絡協議会
<small>まえかわ</small> 前川 <small>いくこ</small> 育子(△)	茅ヶ崎市子ども会連絡協議会
<small>かめやま</small> 亀山 <small>けいじ</small> 計次	茅ヶ崎市公民館運営審議会委員連絡協議会
<small>おおもり</small> 大森 <small>みおこ</small> 美保子	茅ヶ崎市私立幼稚園協会
◎ <small>よしはら</small> 吉原 <small>ひろこ</small> 弘子(△)	学識経験者
<small>くさか</small> 日下 <small>ひでひこ</small> 英彦(△)	茅ヶ崎市青少年育成推進連絡会議 (平成26年9月26日～平成28年9月25日)
<small>もうり</small> 毛利 <small>ともひろ</small> 智宏(△)	学識経験者 (平成26年9月26日～平成28年9月25日)

◎議長 ○副議長  
△起草メンバー

## 提言書作成のための起草委員会議

回	開催日	議 題
第1回	11月20日(金)	提言書の作成について
第2回	11月27日(金)	提言書の原稿確認について
第3回	12月4日(金)	提言書の原稿確認について
第4回	1月15日(金)	提言書の原稿確認について
第5回	2月4日(木)	提言書の原稿確認について
第6回	2月12日(金)	提言書の原稿確認について
第7回	3月2日(水)	提言書の原稿確認について
第8回	3月4日(金)	提言書の原稿確認について



提言

社会教育施設・社会教育関係団体の活性化に向けて  
～地域の教育力を高めるために～

平成28年3月

発行 茅ヶ崎市社会教育委員会議

編集 茅ヶ崎市教育委員会教育推進部社会教育課

〒253-8686

神奈川県茅ヶ崎市茅ヶ崎一丁目1番1号

電話 0467 (82) 1111